

# 碩 心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可  
神奈川 碩 心 会 発行

現在 会員 数名  
2年8月 156名  
返子地区 260名  
大船地区 47名  
(合計) (463名)

2年8月号 (217号)  
発行 者 根 岸 岳 萃  
編 集 者 中 村 愛 岳

## 酷暑所感

会長 根岸 岳萃

残暑お見舞申し上げます。大方の支部では夏休みで、十分体調に留意され、秋に向って健康管理されていると思います。

碩心会では、今春の総会で役員改選が行なわれ、人生の先輩の先生方には、多忙な役職から離れ、常任理事と同格の参事になつていただいて、指導者として、指導に専念して戴くことになりました。本当に長い間ご苦労様でした。これからも後輩の役職の相談のつて、運営に協力願います。

又今度常任理事、副部長等に就任されました先生方も大変と思います。苦勞もかけますが、碩心会発展のため頑張つて下さい。歳々年々人同じからず：私自身も最近年令を感じておりますが、人の生や気なり”元気に頑張りたいと思っております。

秋には早々に昇段審査、県本部吟道大会、碩心会温習会等々、行事もたくさん予定されておりますが、皆さんが健康で、明るく吟道に精進され、碩心会発展のため、絶大な協力をお願いします。

”吟道は気を養うの道なり”

## ◎碩心会 秋季審査会のお知らせ

とき・9月16日(日) 10時開会

ところ・返子市立図書館ホール

(初段～八段まで)

◇審査料は従来通り。各支部毎にまとめて当日までに納入のこと。

◇許証料(消費税共)は9月24日(指導者講習日)までに納入のこと。

## ◎第46回県本部吟道大会のお知らせ

とき・10月21日(日)

ところ・海老名文化会館

出吟料・三百円

出吟 返子49名 (独吟1・合吟2・合吟1)  
コンクール1・詩舞1

割当 葉山55名(独吟2・合吟2)

大船20名(独吟1・合吟は返子と)

◎合吟コンクールは1チーム10名で、吟題は絶句で自由

## 県本部第二地区大会終る

7月8日(日)鎌倉市中央公民館分館に於て右会が行われ、当会から独吟、合吟、詩舞にと多数の方が参加しました。

又連吟コンクールには各会から15組が参加、その中から5組が入賞し、当会から次

のチームが4位に入賞されました。おめでとございました。(3・4位は同点)

4位 本能寺(鈴木チエ) 赤池菊枝 (一色A)

#### 碩心会 各部連絡協議会ひらかる

7月9日(月)午後7時より六代御前社務所に於て、新任役員による右会がひらかれ、今後の運営についての案、協議事項、其の他について話し合われました。

#### 御協力をいただき勉強を

会計部長 矢嶋悦岳

台風11号が近づき、この処の猛暑もひと息という今日この頃です。皆様如何お過ごしですか。

この度会計部長という大変なお役を仰せつかり、大変困惑いたしております。前任の秋元先生が、きめ細やかな記載をされていられた台帳を渡された時は、一瞬目をみはりました。抱負をとの御要望ですが、まだまだ五里霧中の状態ですので、先ずは勉強をいたしまして前任者に近づき、少しでも会のお役に立てれば幸いに存じます。

何とぞ皆様方の御協力を頂きたく思います。よろしくお願い申し上げます。

#### 副部長と力合わせて

企画部長 村田滯岳

暑さきびしい日々が続いておりますが、皆様お元気でお過ごしでしょうか。

本年二月、千葉岳香先生が、第14回碩心会温習会の準備の途中で急逝され、急遽私に引継ぐようにとの事で、解らないながら皆様の御協力をいただき、無事温習会も盛会の裡に、終らせていただきました。

故千葉先生が、企画部長という大変な仕事を、御立派に処理されていまして、とても私では力不足だと思いますが、副部長の綾部秋岳さん、松井正風さんがお手伝いをして下さるといふことなので、お引受けいたしました。

まだ手さぐりの状態なので、自信はありませんが、皆さまに助けていただけて、碩心会の為にお役に立てばと思っております。大船地区温習会、来年の初吟会、又来年は岳風記念館への旅行を企画しては…というお話も出ておりますので、其の節にはよろしく御協力をお願い申し上げます。

企画部長としての抱負等書く様にとの事です。皆様の温かい御協力がなければ成り立たない仕事だと思っておりますので、何卒よろしく御指導の程お願いいたします。

大野孤山先生作

#### 白絹の挽歌に和す(一節)

停戦の詔勅により大東亜戦争は、大きな深い深い爪痕を残して終りを告げた。

この大きな傷痕に泣く一人の齢若き人妻がいた。召されて征った夫は、遠くシベリヤの地で、ついに還らぬ人となった。あー何たることか…。事なき姿を待ちこがれていたのに。溢れる涙拭いもせず、自ら髪をおろして尼僧となり、夫の冥福を祈った。

御下賜の白絹は、一体何を意味するものであろうか…。このころのたけを三十一字にまとめ、帰還船の船員にたくし、夫の眠るナホトカの海に投じてもらった…という。

たれひとりたづぬる人なきおくつきに

たゞ白雪のふりつもるらむ

嗚呼尊き哉白絹の妙

大君夫君を嘉せし記念なり

滄溟に放流して英魂に逢わしめ

乞う君飄然下りて之を享けよ

夢に見る夫君は天涯の人

朔北の荒草何ぞ茫茫たる

前記ナレーションは秋元梁岳先生が作成されたものです。

総本部 夏季吟道講座開催さる

宇都宮 徳風

去る7月28日(土)29日(日)の両日に亘り、第36回夏季吟道講座が、九段会館に於いて開催され、総本部竹未理事長以下の理事先生及び、大会役員の先生方の、行き届いた準備と、適切な運営、並びに各地から選抜された講師先生の熱の籠った御指導により、全国から参加した一一四七名の受講者は酷暑を忘れて勉強した。

今回は奥伝以上に制限したので、大部分が各地の指導者の立場の者が多かった為、総本部はこの受講者に、岳風会の流統を正しく教え、各地に帰って正しく伝える様にとの熱心な指導と、この流統を少しでも多く学び取って帰ろうとの、受講者の意気込みが一体となって、会場は熱気を帯びる有意義な講座となった。

傾心会からは根岸会長が総本部理事として、加藤圭岳、立沢御岳、松井正風の各先生が、大会役員として御世話に当たったが、特に加藤先生は開講式及び閉会式の司会役を勤めると共に、講演の中の連吟に出吟されて気を吐かれた。

当会からの参加者は次の通りです。  
加藤岳相 中村幸岳 山口夕岳 村田滯岳

高梨以岳 上村象岳 佐久間爽岳 木村松岳  
寺脇宇岳 宇都宮徳風

◎ 吟道講座所感戯歌

(林 岳葉先生)

男女別 一、二、三階、全体と  
合の手無しの 稽古厳しき  
(安藤英男先生の講演)

南洲の 生涯語る講演は  
ノンストップで 翔ぶが如くに  
(松岡岳光先生)

道産子の 素朴な吟に 熱を籠め  
名吟よりも 正吟を説く  
(佐々木岳中先生)

釣瓶にも 難にも学びたり  
創意工夫で 吟が上達  
(竹未岳陽先生の講話)

願わくは 会の流統学びとり  
津々浦々の 弟子に伝えて  
(浜 岳優先生)

上手でも 自己流止めよ原則は  
二句三息で 質実がよい  
(小俣岳鶴先生)

山梨の 名鶯さすが高音の  
魅力講義で 生徒酔わせり  
(藤森岳宇先生)

いろいろの 符付を学ぶ五言古詩  
正しく覚え 正しく伝えて

出典の解説

記事を埋めるため、自分の勉強を兼ねて、我々詩吟愛好家に縁のあるものの中から、簡単な解説を選んでみました。

(万葉集)

わが国現存最古の歌集。八世紀後半成立。約四百年にわたる歌、約四千五百首から成る。大伴家持が中心となって撰にあつたといわれる。二十巻。

(日本外史)

頼山陽が著した、源平から徳川氏に至る武家の歴史書。尊王思想に大きな影響を与えた。二十二巻。

(唐詩選)

中国、唐代の詩人百二十七人、四百六十五首を詩体別に分類した詩集。明の李攀竜の撰といわれるが明らかでない。全七巻。

(詩経)

中国、周のころにできた東洋最古の詩歌集。孔子が編んだものといわれ、五経の一。

(楚辞)

中国、戦国時代中期の楚の屈原と、その門下の作品に、漢の作品を加えた詩集。北方の「詩経」に対し、南方文化を象徴する最古の作品集。

練吟  
メモ  
和歌と短歌

○「朗詠集」中の和歌数は、万葉集、古今集および新古今集から計十三首、その時代からくだって徳川時代末までの分を十四首登載している。現代短歌としては、明治天皇御製二首を別として、石川啄木、若山牧水が四首ずつ、そのほかが四首配分されている。ところで、朗詠集がその目次で、掲載の四十一首を一括「短歌」と揭示しているため、朗詠練習の現場においては（明治以降を「短歌」とするよう統一してあるにかかわらず）未だに和歌と短歌の区分に戸惑いしている者が認められるので、極めて大雑把ではあるが解説を加えてみたい。

○ 子等を思ふ歌一首（朗94）山上憶良  
瓜食めば 子ども思ほゆ 粟食めば まして偲ばゆ いづくより 来りしものぞまなかひに もとなかかりて 安眠しな  
さぬ ※  
銀も 金も玉も なにせむに  
優れる宝 子に及かめやも

※（筆者付記）までが長歌で、以下が長歌の意を要約した「反歌」である。この「反歌」を含め、同形式の歌を、当時は長歌に対し「短歌」と称した。

○短歌をはじめ、数種の短詩型の歌をまとめて短歌と言っていたもので、漢詩（唐詩）に対して和歌（やまとうた）と呼称した。ところがやがて長歌と、旋頭歌など短歌の類が衰微してくると、和歌といえばすぐこの「三十一文字」の歌を意味するようになった。国民的詩歌となった和歌の歴史は幕末まで千有余年も続いた。しかし、明治維新を境として、和歌はその根底から革新された（和歌通史・風間書房）。すなわち、欧米の詩の翻訳輸入に伴って新体詩論と、それに影響された激しい和歌の革新運動が展開された。そして和歌は、これまでの「和歌」に替り、同じ字面であるが新生の「短歌」として再出発し、やがて史上に揺るぎない隆盛期をもたらしした。

○朗詠集の「序」では「和歌」として朗詠上の方針が述べられ、目次に入って「短歌」で一括されている。何れにしても、朗詠上は明治初年までのものは「和歌」、それ以後の作者のものは「短歌」ということで區別してよいと思う。ただし、明治天皇御製は「御製」として朗詠すれば問題ないが、教本にある山岡鉄舟の歌は、職掌柄宮中御歌所の古式に属するので（和歌か短歌かで）問題は残るが、朗詠上は短歌として扱ってよいと思われる。

追贈

吟甫支部の鈴木心風さんが死去され、皆伝（心岳）が追贈されました。

（訂正）

7月号「十周年に寄せて」の文中、E班とあるのはF班の誤りに付お詫びいたします。

（入会）

578 長谷川幹子 葉山町長柄三三七―二九

（一色B）（電）〇四六八一七五―〇八七八  
（退会）

98 鈴木心風（吟甫） 450 森永恵泉（堀内・F）  
469 木下弘泉（吟甫） 500 池田亜砂子（真澄）

編集後記

男児志を立てて郷関を出ず  
学若し成る無くんば復た還らず  
骨を埋むる何ぞ期せん墳墓の地  
人間到る処青山あり

「人間到る処青山あり」は思い切って、勤め先を変えたりする時に、みずからを励ますのに使われる諺として一般に用いられています。戦後、多くの日本人がころがる石になり、青山を信じ、故郷をあとにして、人口大移動がおこりました。

八月は盆休みの真つただ中…多せいの人達が故郷へ帰ってゆく…。